

# 生存科学研究ニュース

VOL. 16. NO. 5 2001. 9. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1  
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608  
Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

## 常務理事会報告

平成13年7月18日（水）生存科学研究所会議室において、標記会議が開催され、下記の項目について討議された。

- (1) 平成13年度生存科学研究所活動予定について
- (2) レオンチェフ文庫について
- (3) 生存科学研究所資産運用について
- (4) 慶弔規定について
- (5) 就業規則について
- (6) その他

(1) 江見理事長より平成13年度生存科学研究所の活動予定について報告が行われた。

(2) 生存科学研究所が所有権を持つレオンチェフ文庫は、現在、委託契約に基づき中央大学が管理しており、本年末の期限切れ以降の取扱について中央大学と江見理事長との話し合いがもたれ、江見理事長からその報告が行われた。

(3) 鈴木専務理事より資産の運用替えについて報告が行われた。

(4)、(5) 慶弔規定改訂（案）ならびに就業規則（案）が提示され審議の結果それぞれ承認された。

## 第13回銀座ナイトセミナー「生きる」

平成13年5月11日（金）午後6時より、東京理科大学理学部教養学科の田崎美弥子助教授を招いて、「スピリチュアリティと『生きる』」と題して表記セミナーが開かれた。本セミナーは、「〇〇者の『生きる』」としてこれまで12回行われてきたが、今回よりスピーカーを若い世代にお願いし、一つのテーマについて、話題提供と討論を行う形式とした。

田崎氏は、現在、世界保健機関（WHO）によるQuality of Life（QOL）の調査票であるWHOQOLの開発に参加してこられた。本調査票は、1992年に開始され15カ国でのフィールドテストを経て1998年に完成した。同

年には後述の健康の定義の議論を受けWHOQOL (spirituality and personal belief 版) プロジェクトが開始された。国際的調査票の開発では、文化適応性として異文化間における概念と言語上の等価性や計量心理学的側面が検討されるが、その過程や日本でのフィールド調査の結果が紹介された。WHOのQOLの定義は、個人が生活する文化や価値観の中での状況に対する認識を対象としている。健常人を対象としたWHOQOLの結果では、東京は心理・自立のレベルで下位に位置したとのことである。

WHOでは、スピリチュアリティは80年代前半から議論されはじめ、1999年の第52回世界保健総会で健康の定義に加える改訂案が提出されたが、審議は先送りとされた。スピリチュアリティは、日本では霊的や霊性とも訳されるが、定訳はない。

QOL研究のフィールドは元来、癌患者に対するものであったが、近年では広範囲に行われている。QOL研究でのスピリチュアリティの登場も、末期癌患者の痛みの一要素としてのスピリチュアルペインからであった。WHOQOL (SRPR版) 開発プログラムでは、スピリチュアリティについていろいろな立場の宗教家とQOL専門家の間で議論されたが、そこでは宗教性との密接な関係が重要視されたとのことである。

氏の講演をうけ、WHOの健康の定義について、近年の遺伝子研究の発展に伴う諸問題や各種の障害への取組み方、また文化適応性の問題として特にキリスト教文化圏と比較した日本におけるQOLおよびスピリチュアリティの意味合いなどについて盛んに討論された。

また、氏は日本人として、欧米が主体となったプロジェクトにおいて、異文化からの参加者としての苦勞を経験されたわけであるが、今回のセミナー参加者の多くが同様の経験を持ち、感じることも多かったようである。(津谷喜一郎・金子善博)

## 21世紀における生存科学としての HIV感染の構築研究会

平成13年7月7日(土) 18時より20時まで、生存科学研究所において標記研究会を開催した。

今回は、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系国際保健学・教授の木原正博氏を講師に迎え、「日本における21世紀のエイズ流行のシナリオ」をテーマにお話しいただき、その後参加者で討論を行った。

### 概要：

木原氏は、エイズの疫学を専門にされており、今後、我が国のHIV感染が爆発的に拡大するであろうことを懸念しておられ、個別訪問や面前自記式などの調査に基づいて、現状を明らかにし今後の予測を示された。

HIVウイルスは巧妙なウイルスであり、変異性が高く、人間の性行為を利用し、潜伏期間が長い、などの特徴を持っている。1970年代にアフリカに始まった感染は、アメリカ、アジア、ヨーロッパにいたり、今後は中国、日本での爆発的拡大が予測されている。流行には、性行為が行われる性的なネットワークが存在することや、クラミジアやヘルペスなどの性感染症(STD)がHIV感染の触媒の働きをしていること、またHIV感染の流行が一波だけではなく何回にもわけて起こることなどが影響している。現在、世界には3500万人近いHIV感染者が存在するが、2010年には、中国で1000万人、日本で5万人に達すると予測されている。このような世界規模でのHIV感染者の増加は、世界の人類の安全保障の問題としても考えなければならない。

特に、日本で憂慮されるのは、若年層の最近の性行動の変化である。その特徴としては、初交年齢の低下、相手年齢の同年齢化、相手人数の複数化、性行動の男女差の縮小、売買春の増加、セックスの多様化、コンドームの使用率の低下があげられる。中でも、相手人数の複数化が、男女何れ

においても増大しネットワーク化しており、コンドーム使用率は相手人数に反比例していることなどが注目される。また、日本におけるHIV感染に関する知識の無さも憂慮されている。

以上のように、HIV感染については世界的な拡大とともに、我が国における問題は深刻の度を深めていることが示された。

その後の討論では、以上のような状況に対する一般社会の理解度が低いことや、今後の予防方法の開発・普及のためのセンターの設立などの社会的対応の緊急性などについて認識が深められた。

(大林雅之)

#### 第10回

#### 21世紀世界の文明と生存の研究会

平成13年8月4日(土)午後6時30分より生存科学研究所において「武見太郎が生存科学研究所に期待したもの」をテーマに標記研究会を開催した。

出席者：大林雅之、高木廣文、武井実根雄

手塚圭子、丸井英二

概要：

今年度の第1回であり、初心に戻る意味もあり、メンバーの丸井が、武見太郎の生涯の概略と生存研の存在意義について考えるところを報告した。

武見太郎氏は明治37年3月7日京都に生まれ、その後、東京上野桜木町に育つ。開成中学在学中に腎臓病により中学校を2年間休学。そののち、慶応義塾普通部に転校し、慶応義塾大学医学部を卒業。父祖以来の日蓮宗一家であることもあり、在学中は仏教青年会のメンバーとして活躍する。昭和5年卒業、内科学教室に入局するも、33歳のとき病院をやめる。昭和13年、銀座に診療所を開設(現在の生存科学研究所の場所)。この時期、理化学研究所(仁科芳雄主任研究員)に入所し、自由な研究の世界を満喫する。昭和18年、出生後まもなくの長男を亡くす。その後2男2女。

戦後は、昭和25年(46歳)、日本医師会副会長(会長；田宮猛雄)となり、紆余曲折の後、昭和32年、日本医師会会長となる(以後25年間)。昭和50年には世界医師会会長となり、日本での総会において「医療資源の開発と配分」シンポジウムを開催する。これがハーバード大学武見講座の理念となる。昭和57年には医師会会長を引退。58年12月20日没(79歳) 以上のような略歴の紹介の後、生存科学研究所は武見太郎氏にとっては、“かつての理化学研究所をひとつの理想型として機能する存在”として期待されたのであろうという仮説を提示したところ、その現在と将来のありかたについて出席者の間でさらに活発な意見が出され、議論が行われた。

さらに武見太郎氏没後20年を2年後に控えて、その生前に直接お会いすることのなかったメンバーがほとんどである本研究会で、改めてその地域医療、生存科学などについての思想の再検討を行っていききたいという意見が強く出された。

今回の研究会の様子については録音が残されており、今後他のメンバーを含めたより広い論議の出発点となることを願うものである。今回は参加者が少なかったが充実した研究会となった。(丸井英二)

#### 第15回銀座ナイトセミナー「生きる」

2001年8月29日(木)午後6時より、国立公衆衛生院疫学部主任研究官の三砂ちづる氏を招いて「産むことに向き合って『生きる』」と題して表記セミナーが開かれた。

氏は薬学部卒業後、ロンドン大学衛生熱帯医学院で疫学の博士号を取得している。出産・中絶・母子保健などreproductive healthの分野の研究、フィールド・ワークに従事した後、1996年から2001年にかけてブラジルで国際協力事業団(JICA)による出産の「ヒューマニゼーション」プロジェクトに参加した。

ブラジルでは近代西洋医学に基づく産科が早期に普及し助産婦という職業が確立せず、WHOの妊産婦死亡率を下げる戦略 (Safe Motherhood Initiative) の影響も受け、出産への医療介入と施設化が進み、帝王切開による出産が約40%であった。これを問題視する政府からの要請を受け、JICAは主にインディオ系とポルトガル系移民の多い北東部セララ州をフィールドに、自然分娩のトレーニングのプロジェクトを、日本の助産婦も参加して進めた。その経過で「出産のヒューマニゼーション」の定義づけを、エビデンスに基づき、費用効果分析も踏まえ、女性とhealth care providers が調和し平等になされる意思決定を通して、女性がempowermentされる過程であるとした (Lancet 1999; 354: 1391-2.)。その成果は人類学的な質的研究の方法論により評価したが、最後には、ヒューマニゼーションとは、定義できない自己変革の過程であると気づかされた。

以上のような概要の紹介に続き、ブラジルで製作された2本のビデオ「根をもつことに戻る」(1995)、「Parto de cocoras [インディオのようにしゃがんでお産を]」(1979)が上映された。上映を通して、疫学者である一女性として「産むこと」、「生きること」に関わる三砂氏の生命観が語られた。1本目はUNICEFの製作で、ブラジル中央部の小さな産院に勤務する二人の女性医師による、女性の力を生かす出産を目指す活動を紹介している。妊娠・出産の過程で女性は豊かに美しくなってゆき、しゃがんだ姿勢による重力に逆

らわない出産は、自然と生命の摂理に適っており、出産直後の母子に静かな出会いを体験させる。2本目は、しゃがむ姿勢による出産シーンだけを連続的に映し出す。この2本目を製作した産科医は医療化 (medicalization) の波に押されその後、活発に活動できなくなったという。このしゃがむ姿勢は、インディオの女性が代々受け継ぐ知恵の一つであるはずなのだ。

その後の討論では、出産や性と生殖をめぐる文化や医療の現状などについて議論し、フェミニズムの一つの方向性であった「医療が女性の身体を管理するモデル」(ガン検診、妊娠中絶、HRTなど) から、文化的営みとしての出産に向き合うことで、女性としての「原身体経験」を取り戻せる可能性が示唆された。Archiebald L. Cochraneの、人間には自然に治る力がそなわっているからこそ医療介入は十分なエビデンスに基づいて行わなければならない、という言説の引用に、「根を持って生きる」三砂氏のempoweringなメッセージが込められていた。

(津谷喜一郎・栗原千絵子)

#### 研究所日報

- 7月10日 (火) 3 役会
- 7月18日 (水) 常務理事会
- 8月4日 (土) 21世紀世界の文明と生存の研究会
- 8月29日 (水) 第15回銀座ナイトセミナー
- 9月7日 (金) 生存科学講座委員会